「氏家」日テレ会長を元政治部長

故・楢崎代議士と組んだ菱山氏(右)

84歳とはいえ、2人は単なる後期高齢者ではない。

読売新聞グループ本社会長にして主筆の渡辺恒雄氏と、日本テレビ会長の氏家齊一郎氏はともに旭日大綬章を受章し、いまだにメディア界の権力者である。

時の宰相すら喜んで会うこの2人を、『メディア権力の研究』と題した論文で批判したのは、駒澤大学マス・コミュニケーション研究所の非常勤講師を務める菱山郁朗氏(66)である。

菱山氏は早稲田大学政治経済学部を卒業後、日テレに入社。88年に起きたリクルート事件当時は報道局記者で、リクルートコスモスの松原弘社長室長が、「国会の爆弾男」こと楢崎弥之助代議士(社民連)に500万円を渡そうとした衝撃的シーンの撮影に成功した。

楢崎代議士は、リクルート社から中曽根康弘前首相(当時)、竹下登首相(同)、宮沢喜一副総理兼蔵相(同)らにコスモス社の未公開株が譲渡された問題を国会で激しく追及していた。代議士への贈賄工作の一部始終を隠し撮りした映像は、いまだに語り草になっている。

このスクープをものにした菱山記者は、政治部デスクを経て、93年に政治部長に就任した。04年に日テレを報道局参与で定年退職した後は、駒大をはじめ他の大学でもマスメディア論やジャーナリズム論などを講じている。

『メディア権力の研究』なる論文はA5判横組みで70ページに及ぶ。論文が掲載されたのは駒大マス・コミュニケーション研究所が刊行した『研究所年報』(第28号)。発行日は今年3月31日となっているが、実際に印刷、製本されたのは9月だ。菱山氏本人が語る。

「私は99年より駒澤大学の研究員として、メディアと権力について研究をしてきました。大学に講座も持っており、『現代メディアと報道論』というテーマで講義をしています。読売の渡辺氏と日テレの氏家氏を研究対象にしたのは、リクルート事件の取材で宿命的な部分として残っていたからです。22年経って検証しているうち、日テレの先輩や後輩、私の講座の受講生たちから、〝何であんな奴らがいつまでも天下を取っているんだ〟〝読売はどうなっているんだ〟と批判されたのです。そうした声を聞きながら、私は研究者としてこの論文をまとめました」

楢崎代議士への贈賄工作に話を戻そう。88年9月5

日本テレビの元政治部長が最近刊行された論文で、読売新聞のナベツネこと渡辺恒雄主筆と古巣の氏家齊一郎会長を痛烈に批判している。在職中に知った事実を挙げて2人の公私混同ぶりを描いた上で、「ジャーナリスト失格」「引退すべきだ」と書いているのだ。

「大ベッネ」と主筆

大批判した日テレの

氏家氏（左）と渡辺氏

日、日テレの夕方のニュース番組『NNNニュースプラス1』で放送された映像が元になり、コスモス社の松原室長の逮捕につながった。菱山論文は当時の渡辺氏についてこう描いている。

〈読売の経営首脳には日本テレビの贈賄ビデオ取材報道を嫌悪の感情を込めて見つめていた人物がいた。疑惑を指摘された中曽根前首相とは極めて親密な関係にある副社長で主筆の渡辺恒雄その人である〉

放送後の渡辺主筆は、〈中曽根派の議員に「日本テレビがとんでもないことをやりやがった。おかしなビデオを放送した報道局の首脳はとにかくけしからん。あんなえげつないやり方で、人をはめるような楢崎のスタンドプレーに手を貸すとは。一体全体何事か。更迭してやるから、必ず……」〉（菱山論文・以下同）

さらに当時の読売社長で日テレ会長でもあった小林与三次氏が、日テレの高木盛久社長と常盤恭一専務を呼びつけたが、

〈同席した渡辺がここでも「余計なことをしてくれたもんだな。やり過ぎだよ。あんなことをやるとは。一体どういう社員教育をしているんだ、君んとこは？」とすごんだ。そして「検察がしゃしゃり出てきたら中曽根の周辺まで追及の手が伸び、中曽根の立場が危うくなるではないか」とまで言った〉

渡辺主筆の中曽根氏に対する肩入れはこれだけではない。

中曽根内閣は86年夏の衆参同時選挙で、大型間接税は導入しないとの公約を掲げて大勝したが、税収の直間比率の見直しという名目をつけて、大型間接税導入の構えを見せた。

86年12月5日の読売新聞夕刊のコラム「よみうり寸評」は、中曽根首相を批判する中身だった。

〈中曽根首相は七月の同日選のとき「大型間接税は導入しない」と選挙民に約束した。（中略）いっぱい食わされたことを次の選挙までに忘れてしまうほど選挙民の知的水準は低くない〉

遠隔地で配達する2版までは掲載されたが、東京都心部などで読まれる最終の4版には掲載されなかった。

「ろくなモンじゃない」

一方、渡辺主筆の盟友で、かつて菱山氏の上司だった氏家会長についても、この論文は様々なエピソードを紹介している。

92年に日テレの社長に就任した氏家氏は、「トップの専権事項は人事だ」と公言して憚らなかった。次期社長候補だった専務を系列の地方テレビ局に飛ばしたり、副社長時代の元女性秘書を07年の人事異動で局長に抜擢したりした。

彼女は80年入社で女子アナ志望だった。氏家氏との個人的関係を報道されて退職も考えたが、頼りにして

いた先輩ディレクターに説得されて思いとどまると、

〈氏家という巨大な後ろ盾があることで（中略）周りの人間たちはピリピリし、やがて（中略）部長やチーフプロデューサーなどを経験していくうちに次第に腕力をつけ、人事にもモノを言うようになっていく。彼女と衝突した人物はいかに仕事が出来てもことごとく排除された〉

興味深いのは、報道局ニュースセンター次長やネットワーク局番組販売部長を歴任した高村勇作氏と氏家会長とのやり取りである。

〈氏家は高村に会うと「お前がリクルートをやったらしいな」（中略）高村は「はい。やりました。プロジェクトも作って、指揮も執りました。あるところから未公開株の譲渡先リストも入手し、そこからすべてが始まりました」〉

氏家氏は高村氏にリストを見せろと命じたが、高村氏が拒否すると、

〈氏家は「あれはやり過ぎだったな。余計なことをしたもんだな、全く……」〉

氏家氏は高村氏に、岸内閣で椎名悦三郎官房長官の秘書官を務めた福本邦雄氏との交際についても尋ねた。

〈高村は「はい、大変御世話になっています。私にとってはとても大切な方であり、有力な情報源でもあります」とこたえた〉

さる11月1日に亡くなった画商の福本氏は有力な政治家と親交が深く、政界のフィクサーと言われた。

ジャーナリスト失格

93年5月ごろ、氏家氏は東京ドームの貴賓室に大手スポンサーの幹部を招待しようとしていた。だが、予約名簿を見ると、すでに予約が入っている。ゲストは宮沢内閣で通産相だった森喜朗氏、接待者には高村氏の名前が記されていた。

〈「何だ、これは。おい直ぐ高村を呼べ」氏家は8階の社長室に高村を呼びつけた。「おい、どうなっているんだ、これは。お前にそんな権限があるのか」いきなりブチ切れたような氏家の態度に高村は面食らった。「そうおっしゃられても……森さんがジャイアンツ戦を観たいと言われたので、秘書室長を通して、席を取らせていただきました。ちゃんと社長の決裁も頂いております」高村は静かな口調でハッキリと答えた〉

氏家氏は理不尽にも怒鳴り始めた。

〈「口答えするとは何事か！」と怒りを露わにし、「大体お前は生意気だ！ここで立ってろ！」と通告し、高村を社長室に立たせた。まるで小学校のお仕置きである。（中略）氏家は「大体森のヤツめ俺が宮沢に頼んで通産大臣にしてやったのに、何で俺の所に頼んで来なかったんだ」と怒りはおさまらない〉

高村氏は30分近くも立たされたそうだが、パワハラもいいところだろう。

さて、2人に、菱山論文について見解を尋ねたところ、読売の渡辺主筆からは、「日本テレビのビデオ放送に批判的な発言をしたことはない。中曽根氏についての発言は事実無根である。菱山氏の論文は、他にも事実と異なる記述が極めて多く、見解を述べることはできない」

との回答があった。日テレの総合広報部からは、「ご指摘のような事実はありません。また、菱山氏の見解についてのコメントはいたしません」

再び菱山氏が言う。

「私は個人的にもお二人をよく知っているし、世話にもなってきました。しかし彼らは公人です。本来なら世代交代があるべきなのに、両巨頭がメディア権力として岩盤のごとく立ちはだかっている。権力者が長くその地位に留まれば、必ず腐敗が起きます。細川護熙元総理が『権不十年』と言ったように、長期独裁政権はよくないのです」

菱山論文はこう締めくくられている。

〈身体を張って日々取材活動を続けている大多数のジャーナリストにとって全く模範とはならないし、健全なジャーナリズムは育たない。むしろ二人はジャーナリストとしては失格であり、一日も早く後進に道を譲って引退すべきだ〉

2人が単なる後期高齢者になる日。その日を待ち望んでいるのは、ひとり菱山氏だけではなかろう。